

『わたしを離さないで』における 「凡庸な悪」

松 宮 園 子

序

2017年のKazuo Ishiguroのノーベル文学賞受賞は、英国、日本はもとより世界中で大きな注目を集めた。スウェーデン・アカデミーによる受賞理由の説明として使用された「世界と繋がっているという我々の幻想の裏に潜む深淵」(“Nobel Prize”)を力強く描き出す小説、という表現は、作品数は決して多くはないものの、一作ごとに全く異なるアプローチで人間性の襞に分け入ってきたイシグロ文学の本質を的確に捉えたものと言える。一方、同アカデミーのSara Daniusは授賞式でのプレゼンテーション・スピーチの中で、彼の代表作*The Remains of the Day* (1989)について次のように述べている。

The novel concludes in tragedy — a tragedy of missed opportunities. As a bonus, one gets a sociology of an older class society. Yet the perspective includes a redemptive aspect — not, to be sure, concerning the social order, but certainly the people in it. Ishiguro’s world is a world without heroes. And equally important: there are no predators in sight — and consequently no victims. (“Award Ceremony Speech”)

「英雄も、篡奪者も、従って犠牲者もない」イシグロの世界、という評価は、彼の一見静謐な作品群に対する一般的な見方かもしれない。大半のテキストに

共通する、絶え間なく記憶を再訪し、隠蔽し、捏造する語り手たちは、そのしばしば特異なポジション（例えば執事、名探偵、クローン）にもかかわらず読者の共感を勝ち得る存在となり、特に『日の名残り』や *Never Let Me Go* (2005) は映画化により更に広範な人気を集め、後者は日本において蜷川幸雄による舞台化、更にはテレビドラマ化されるに至った。このような世界市場における知名度と共に、アカデミズムの分野においても、現代を代表する作家としてイシグロ批評はノーベル賞受賞以前から活況を呈していた。そのジャンル横断性、「失われた日本」表象、特徴的な文体、そして「記憶」というテーマは早い段階から文学研究者の関心を集め、数々の検証が為されてきた。

しかし本論が注目したいのは、近年発展著しい学際的研究において指摘され徐々に批評的関心が高まっている、イシグロ作品における「悪」の存在である。上述のスピーチが強調する静謐なイメージとは異なり、彼の各テクストの背後にはしばしば厳然たる「篡奪者」が存在する。例えば『日の名残り』においてはナチス・ドイツ、*When We Were Orphans* (2000) においては1930年代の上海に暗躍する中国人マフィア、『わたしを離さないで』においては他ならぬ英国政府が、主人公、あるいは彼らの愛する人々の精神的・身体的安寧を脅かすものとして小説世界を覆っている。そして、イシグロ文学のトレードマークとも言えるこの無力な、そして悪意を持たない主人公たちは「犠牲者」であるばかりではなく、時に「悪」に近接していく。政治科学者のJ. Peter Euben、政治哲学及び文学・文化研究を専門とする John McGowenが共に、Hannah Arendtの「凡庸な悪」の議論を『日の名残り』の執事 Stevensに応用し、彼とAdolph Eichmannの思考形態の共通点を指摘したことは、これまでのイシグロ批評に新たな視座をもたらしたものと言える。本論では、まず両者の政治哲学的論考を振り返ることでイシグロ文学における悪の存在を確認し、その後このテーマを更に文学的に掘り下げるために、特にディストピア批評において近年注目著しい『わたしを離さないで』を題材に、イシグロの「凡庸な悪」の表象の意義について検証していく。

まず議論の出発点となった二つの論考が深く依拠しているハンナ・アーレントの「凡庸な悪」の思想の今日的意義について概観しておきたい。マクガワンも述べているとおり（232）、2001年のアメリカ同時多発テロを経た世界においてアーレントの思想は新たな切迫性を持って政治哲学分野のみならず、文学批評においても大きな注目を集めている。¹ 普通の人間が悪に加担することを如何に防ぐべきか、という問いへの答えを、約半世紀前に大きな議論を巻き起こしたアーレントの主張の中に、人々は見出そうとしている。2012年に制作された、アイヒマン裁判を巡るエピソードを中心とした伝記映画も高い評価を受け、日本でも2013年の公開時には大きな話題を集めた。1961年4月に開始されたアイヒマン裁判の傍聴の記録として、1962年に *The New Yorker* 誌に5回に分けて連載された後、1963年5月に単行本として出版された *Eichmann in Jerusalem* は、発表当初から激的なバッシングの標的となった。他ならぬユダヤ人評議会の指導者層がホロコーストに加担していたことに言及した点も大きな理由であったが、ナチス・ドイツのSS中佐として強制収容所へのユダヤ人大量移送の責任者であったアドルフ・アイヒマンを、「怪物 “monster”」ではなく一人の凡庸な官僚であったと看破したことが、彼の罪の矮小化に繋がると批判されたのである。

自ら思考し、判断する能力を放棄し、ただ上役の命令に忠実に従うことのみ生き甲斐を見出した一つの歯車——アーレントによるアイヒマン像を煎じ詰めれば、それは確かに『日の名残り』の執事スティーヴンスに当てはまる部分が多い。ユーベンは「仮にスティーヴンスがナチス支配下に生きていたなら、アイヒマンと同じ誘惑に駆られていたことだろう」（105）と述べ、彼の想像力や好奇心の欠如、及び倫理的責任を回避し続ける傾向を指摘する。ユーベンが特に注目するのは、しばしば彼が遂に「真実」を直視した瞬間と解釈される、

1 例えば Jervis は、アーレントの “natality” の概念を『わたしを離さないで』に関連づけて論じている。

Miss Kentonとの再会後に棧橋のベンチで行きずりの元執事を相手に心情を吐露する場面である。忠誠を捧げたかつての雇い主である Lord Darlingtonが「間違いを犯したことを、人生の終わりに認めることができた人物」と述べた後、彼は自分自身について涙ながらにこう語る。

As for myself I cannot ever claim that. You see I *trusted*. I trusted in his lordship's wisdom. All those years I served him I trusted I was doing something worthwhile. I can't even say I made my own mistakes. Really—one has to ask oneself—what dignity is there in that? (243: イングロによる強調)

このスティーヴンスの台詞について、ユーベンは「責任の否定というよりは、認識あるいは嘆きのように聞こえる」(110) としながらも、もしスティーヴンスが「自分で間違いを犯した」のではないなら、誰の間違いなのか、と問いかける。

しかし彼の議論の狙いは、スティーヴンスの糾弾にあるのではない。現代文学の登場人物の中でかなりの知名度を獲得し、しかも読者の共感を誘うと考えられているキャラクターを用いて、「普通の人間」の倫理的思考、判断の欠如が「悪」への加担となる現実を指摘し、容易な解決策は見えないながらもその防御手段を政治学的に検討する必要性を訴えているのである。

In the end, I do not think Stevens did anything “evil,” which may have less to do with his character than with opportunity or lack of it. He probably would not have joined what Christopher Browning calls “those ordinary men who shot, day after day, at close range, men, women, and children by the hundreds of thousands.” But we will never know. What we do know is that Adorno's assumption that a “deviant personality” is necessary for someone to do great harm to his fellow creatures is, unfortunately, outdated, as the recurrence of genocides attests. (118)

彼の主張に基づき、スティーヴンスに関するイシグロ自身の有名な言葉、「我々は皆、執事である」²を拡大するならば、「我々は皆、アイヒマンである」となり、それはユーベン自身が引用しているアーレントのアイヒマン評、「アイヒマンに関する問題は、正に彼のような人間があまりに多くいたことだ」(Arendt 276) と不吉に重なっていく。

ユーベンの論を受け、既にアーレントに関する様々な著作を持つマクガワンが発表した論考が“Sufficient unto the Day: Reflections on Evil and Responsibility Prompted by Hannah Arendt and Kazuo Ishiguro” (2008) である。「如何に悪を裁き、対峙すべきか」を政治学的に問う彼の議論においても、スティーヴンスはアイヒマンと「一般人」を結びつける橋渡しのキャラクターとして用いられている。しかしユーベンとは異なり、マクガワンは主にアイヒマン裁判に端を発するアーレントの「悪」の責任論の問題点を指摘するために、スティーヴンスを「厄介なケース」(233) として検証している。例えばアーレントの議論における「思考」の重要性に関して、マクガワンはスティーヴンスを引き合いに出す。

... Stevens' act of narration in *Remains of the Day* [sic] is an act of thinking, but one that is manifestly imperfect because marked so clearly by evasion and rationalization.... Arendt's basic claim for “thinking” is that it leads the thinker to ask: “Can I reconcile this deed I am being pushed by circumstances to perform with my commitment to being-in-the-world in a certain way?...” (243: 筆者による省略)

2 イシグロは様々なインタビューで次のように述べている。“At some level we are all butlers in our relationship to economic and political power” (Singh); “Most of us are like butlers because we have these small, little tasks that we learn to do, but most of us don't attempt to run the world” (Vorda 87).

「悪」への対抗措置を個人の責任感と善意に求めるアーレントの主張の脆弱さを指摘するマクガワンの議論は、『日の名残り』について実に陰鬱な結論を導き出している。

So maybe the novel is not about cementing our view of our own rectitude in relation to Stevens' cowardice, self-ignorance, and refusal to take responsibility. Perhaps Ishiguro is saying that all of us would fail—perhaps not in Stevens' distinctive way, but each of us in his own personal and pathetic way—to stand up to evil. (247)

勿論、これは議論全体の結論ではなく、彼の論文の終章は、国家の行為に対して市民が責任を持つことの重要性、当時のアメリカ社会が直面していた具体的な国内外の脅威への対抗措置に焦点を当てるものとなる。

以上見てきたように、こうした学際的考察は刺激的な視点でイシグロ文学の新たな解釈の可能性を提示し、正にその「深淵」の奥深さを思い知らせるものであるが、一方で文学批評の立場から見ると、テキスト全体における設定、重層的な語りの効果によって浮かび上がるべきキャラクターへの解釈について不満が残ることは否めない。マクガワンの率直な表現がその裏付けとなるだろう。

The book reads to me like a prosecutor's case; every word in it functions to move us toward the verdict: guilty as charged. Of repression, of willful ignorance, of ignoring plain political and historical facts, of taking the lesser light for the greater, of lacking the most basic human feelings toward father and possible spouse. Verily, the butler did it. (241)

イシグロが生み出した主人公が、その静謐な語りの中で確かにアイヒマンとの相似を強く感じさせる責任回避と思考判断の停止を明らかにすることは事実である。それは、一般的イメージとは異なり、イシグロ文学においてキャラク

ターたちが時に「悪」と極めて近接していること、そして篡奪者や犠牲者たちがうごめく世界が透徹した眼差しで描かれていることを我々に思い知らせる。しかし一方で、それでもなお読者がその世界に惹かれ、キャラクターたちの人生を注視してしまうのはなぜか、という点が、上述の議論からは抜け落ちている。³ そこで次章以降では、既に見てきたスティーヴンスとアイヒマンの関係性を念頭に置きつつ、国家/支配者が組織立った「悪」を実践している中での個人の危機的状況が更に大規模な形で描かれる『わたしを離さないで』を題材に、イシグロ文学における「凡庸な悪」の存在について詳しく考察していきたい。

2

2005年に発表された『わたしを離さないで』の設定は、イシグロ作品の中でも特に意表を突かれるものである。小説冒頭に、舞台が「1990年代後半のイングランド」であることが明記されるものの、それが一種のパラレル・ワールドであることが読者には徐々に明らかになる。その世界では、人間への臓器提供のみを目的に作られたクローンが国の各地で生活し、成年に達するほどのタイミングで、まずは「介護人」として臓器の「提供」を行っている仲間たちの世話にあたり、やがて自らも数回の手術によって臓器を摘出され、最終的に「完了」、すなわち死に至る。⁴ 語り手である主人公 Kathy は、20歳で介護人となり、

3 マクガワンは注釈において、彼の周囲の人物の多くがスティーヴンス及びイシグロについて遥かに好意的な解釈を行っていることについて「理解できない」とコメントし、次のように記している。“And it has been interesting to see how vehemently my interlocutors defend both Stevens and Ishiguro. I stand accused of lacking sympathy for Stevens, of making him more pathetic and guilty than he actually is” (253).

4 本作に頻出する婉曲表現は、ナチス・ドイツがユダヤ人に対する「最終的解決」を行った際の「用語規定」に明らかに通じるものである。こうした表現の絶大な効果について、アーレントは次のように述べている。“None of the various ‘language rules,’ carefully contrived to deceive and to camouflage, had a more decisive effect on the mentality of the killers than the first war decree of Hitler, in which the word for ‘murder’ was replaced by the phrase ‘to grant a mercy death’” (108).

その優秀さのために31歳の現在まで仕事を続けている稀有なクローンであるが、小説の最後で彼女の提供も遂に開始されることが予告される。この壮絶な環境の下、キャシーは愛おしげに読者に向けて子供時代から青春時代の思い出を語り、その中で親友や恋人の死、自身が介護する「提供者」たちとの日々を淡々と描写する。

「なぜクローンたちは、自らの運命に抵抗しないのか」という疑問が浮かぶのは当然のことであろう。キャシーによって詳細に描写される、彼らが子供時代を過ごした寄宿学校ヘイルシャムには「保護官」たちがおり、敷地は壁に囲まれているものの、特別な監視システムについての言及は何もない。「外の世界」についての怪談を共有している子供たちは、ただ自らの意思で敷地内に留まるのである。更に16歳になったキャシーたちがヘイルシャムから移動し、他の施設で育った新しいクローン仲間と共同生活を行う「コテージ」に至っては、大人＝人間の目はほとんどなく、クローンたちは時に車に乗って遠出をし、外の世界を自由に歩き回りながら、しかし必ずコテージに帰っていく。彼らにとって唯一の就職にあたる介護人としての生活が始まれば、彼らは一般社会で一人暮らしをしながら、各地の施設や病院を巡回する。そしてやがて提供の開始、すなわち自らの死が告知されるのをじっと待つのである。臓器摘出のプロセスが始まるまでは、クローンたちは、後述するとおり生殖機能はないとされるものの、その他の面では身体的に全く健康な若者たちである。そしてキャシーの語りによって、彼らの心が喜びや悲しみ、愛情、嫉妬、優しさ、怒り、期待や不安、その他数多の「人間的」感情に満ち溢れていることを、読者は痛切なまでに実感させられる。彼らは将来を夢見、愛する人と共に時間を過ごすことを切望する。しかし小説中で彼らが期待する最大の幸せは、提供を数年「猶予」されることのみであり、それが実現不可能であると告げられれば、粛々とその事実を受け入れる。なぜ彼らは提供を拒む、あるいは少なくとも逃亡しないのだろうか。

興味深いことに、『わたしを離さないで』を巡る批評において、この素朴な疑問が正面から取り上げられることは実は少ない。その最大の理由として、作者

イシグロ自身が本作に対するそのようなアプローチを繰り返し否定していることが挙げられよう。

I wanted the sense that it was comfortable for her [Kathy] to resign herself to what everybody else had done already. That it feels normal to her, that it's her duty. I was much more interested in the extent to which we accepted our fates, the kind of lives we were allowed to live as people, rather than focus on the rebellious spirit we gain and try to move out of our lives. I think this is predominantly what takes place in the world, that people take the life they feel they've been handed. (Wong 215)

ここでイシグロが「キャシー」と「我々」を迷いなく並置していることから明らかに、彼はクローンたちが「人間の置かれた状況、我々は死すべき存在であり人生には限りがあるという単純な事実についてのメタファー」(Wong 215) であると述べている。つまり、『日の名残り』のステイーヴンスについて「我々は皆、執事である」と看破したと同様、言わばイシグロは「我々は皆、クローンである」と主張しているのであり、クローンたちの「守られた」子供時代や、その生命の儚さも、犠牲者たちの特殊な状況というよりもむしろ、我々人間全てが共有する運命のメタファーであると示しているのだ。こうしたいかにもイシグロ的な世界においては、確かにキャシーたちが徒党を組んで人間たちに反旗を翻す、というプロットは余りにハリウッド的なステレオタイプに思われ、発想そのものが稚拙に見えてしまう。奇しくも同じ2005年に公開された映画 *The Island* においては、超富裕層向けの究極の保険としてある企業によって秘かに生産されていたクローンの一部が、その運命を初めて知り、自らの命を守るために猛然と組織に対して逃亡と反撃を企てるが、このような展開をイシグロが踏襲しないことは、むしろ当然と感じられるのだ。⁵

しかしキャシーたちクローンの生の儚さを、限りある命の「メタファー」としてのみ捉えてしまうことは、『わたしを離さないで』において国家規模の悪の

プロジェクトが「1990年代後半のイングランド」で粛々と遂行されている模様が詳細に設定されていることの意義の軽視に繋がり得る。仮にクローンたちが人類そのもののメタファーであるならば、テキスト中のMiss Emilyその他の「人間」たちが象徴しているものは何なのか。幼少期のキャシーたちに安全な環境と教育を与えることを使命とし、そして成年に達し死期が迫った彼らと再会してもなお、自らの功績に対する誇りのみを語り、彼らの「猶予」への期待を摘み取ることもより自分が所有するキャビネットの売却の方に注意を向け続ける終盤のミス・エミリーの描写には、実に寒々とするものがある。しかも彼女は「悪」の中枢からは程遠い。彼女も、そしてキャシーたちの運命により多くの憐みの念を見せるマダムや保護官のMiss Lucyもまた、クローンたちの生命を奪うことを容認する国家全体のほんの一部に過ぎないのだ。国家、あるいは社会の描写という面では、『アイランド』よりも『わたしを離さないで』の方が、遥かにグロテスクかつ過激と言える。前者においては、クローンの作製及び臓器摘出は、あくまで私利私欲に満ちた一企業の秘かな企みであり、健康や若さの保持のために自らのクローンを欲する彼らの「顧客」は、クローンは一種の細胞組織状態であり人格等は持たないと告げられた上で、極秘裏に購入を決定する。つまり前提としては、「人間と見分けがつかない」クローンの生命を奪うことは、大多数の「普通の」人間にとっては容認し難いことであり、ごく一部の邪悪な人間のみがそれを企て、最後にはその報いを受ける。一方、『わたしを離さないで』においては、英国民全体が明らかにクローンによる「提供プログラム」(261)を支持しており、国家によるクローンの生命篡奪を是としていると描写されるのだ。

それでは、こうした人間たちは、倫理的判断を回避し、組織に従うことで悪

5 同年に公開されたこの2作品を取り上げた映画評の多くは、『アイランド』のハリウッド的単純さと比較した際の『わたしを離さないで』の独自性を概ね評価しながらも、前者のキャラクターによりリアリティがあることを認めている。例えば Bradshawは次のように述べている。“Michael Bay's *The Island*, however ridiculous, did feature people who raged against the truth when it was revealed to them, and tried to escape. This never seems to occur to Ruth or Kathy or Tommy.”

に加担するアイヒマン的人物のメタファーと言えるだろうか。⁶ そしてアーレントが悪への対抗策として望みを託した思考の力は、『わたしを離さないで』で描かれた「1990年代後半のイングランド」において無力なものでしかないのだろうか。これらの点について、次章で更に検討していきたい。

3

読者が、そしてキャシーが、国家による「提供プログラム」の概要を漸く知るのには、小説の終盤である。組織の末端と言えども当事者の一人であるミス・エミリーによる説明であり、キャシー、そして彼女に同行している恋人Tommyには何ら予備知識がなく、ただ彼女の言葉を信じるしかない、という点を念頭に置く必要があるが、「プログラム」の経緯は以下のようなものである。1950年代初頭の科学技術の画期的進歩に伴い、臓器移植による多数の難病治療が可能となった。ミス・エミリーは、臓器の提供元であるクローンの生育環境の改善を主張し、初の優良施設ヘイルシャムを創立した人物であり、この動きは世論の支持を集め、他にも優良施設が複数設立された。しかしスコットランドの科学者Morningdaleが優秀な遺伝子を付与したエリート種を「違法に」(264)作製しようとしたことが暴露された事件をきっかけに、クローンそのものに対する忌避感が強まり、優良施設は全て閉鎖に追い込まれ、現在は再び劣悪な環境の「政府のホーム」(265)での生育を余儀なくされている。

キャシーの語りと同様、ミス・エミリーの説明には数多くの曖昧な部分がある。臓器の提供元であるクローンについて国民全体がどれほどの知識を得ていたのか、という肝要な点について、彼女は次のように述べる。

6 Stacyは、『わたしを離さないで』のディストピアの設定に注目し、アーレントの思想に言及しながらホロコーストとの近似を指摘した優れた論考を発表している。本論では、Stacyが触れていないクローンの「成り立ち」の不安定さを強調することで、人間、クローン、そして読者の関係性の新たな可能性を考察している。

And for a long time, people preferred to believe these organs appeared from nowhere, or at most that they grew in a kind of vacuum. Yes, there *were* arguments. But by the time people became concerned . . . about *students*, by the time they came to consider just how you were reared, whether you should have been brought into existence at all, well by then it was too late. (262-3: イシグロによる省略及び強調)

ここには明らかに、「プログラム」初期段階での人々の意図的な現実逃避と責任回避が示されている。それは、ナチス政権下のドイツ国民がユダヤ人問題の「最終的解決」についての具体的知識から逃れようとしたこと、強制収容所にユダヤ人を連行する数多の過程に携わった人物たちが「その先の彼らの運命」について考えるのを拒んだ姿勢と、完全に重なる。しかしクローンたちに良好な生育環境を与えようとするミス・エミリーらの運動が絶頂期にあった1970年代後半には、キャシーたちが美術の課題としてヘイルシャムで制作した「アート」の展覧会が全国各地で開かれ、「閣僚や主教、様々な有名人たち」(262)がそこに参加し、講演会が催され、大口の資金提供が相次いだ、という説明を聞けば、この段階でクローンたちが通常の人間と同じく発育し、成長している確固たる「存在」であることは、全国レベルで公の知識となっていたことが窺える。もはや国民には「知らなかった」という言い訳は使用できず、彼らはクローンの生命を搾取する罪を認識しつつ、病からの解放という利を享受する選択をしたことが読み取れる。更にミス・エミリーによれば、「モーニングデイル・スキャンダル」によって彼女たちの努力は水泡と化し、クローンは再び闇の中に押しやられてしまった。つまり人々は、クローンの限られた生にある一定の配慮を与えることさえ拒んだ、あるいはクローンの「生」という概念そのものに再び目をつぶることを選んだのである。ここまでキャシーの語りによってクローンたちの心身両面の成長をつぶさに見つめてきた読者は、ミス・エミリーが「彼ら」と呼ぶ一般国民たちの非情さに、キャシーと共に言葉を失わずにはいられない。

しかし彼らは恐らく自らを篡奪者とも、ファシストとも見なしていないはずである。クローンは人間ではない、という一点を主張すれば、彼らの倫理的正当性は保たれるからだ。“So for a long time you were kept in the shadows, and people did their best not to think about you. And if they did, they tried to convince themselves you weren't really like us. That you were less than human, so it didn't matter” (263)。ここでミス・エミリーが述べる「人々」の論理は、アーレントが引用するナチス・ドイツがユダヤ人殺戮を正当化するために彼らを「人間以下の存在 “subhumans”」(Arendt 277) と呼んだ事実と見事に重なる。しかし、クローンの存在を知りながら、その臓器を利用することで彼らの生命を搾取することを容認してきた英国国民は、決して「人道に対する罪」は犯していない、と主張することで、自らがアイヒマンとは異なると確信できるのだ。

更に深刻なのは、ここで「彼ら」との闘争を誇らしげに語るミス・エミリーが、実は「彼ら」と根底の認識では共通している、という問題である。別れ際に、ヘイルシャム時代のある事件からずっと抱いてきた懸念を、キャシーはミス・エミリーに打ち明ける。現在彼女と同居している「マダム」こと Marie-Claude が自分たちを恐れている、という、彼女にとっては理解し難い謎についてキャシーが語ると、ミス・エミリーは迷いなく答える。“We're all afraid of you. I myself had to fight back my dread of you all almost everyday I was at Hailsham” (269: イシグロによる強調)。そして自分がその「嫌悪」を抑え「正しいこと」(269) を成し遂げた点を、改めて自賛するのである。クローンに良好な環境を与えるための運動に失敗した結果、負債を負い、恐らくそのために売却するキャビネットの搬出に躍起となり、「猶予」への希望も絶たれ、それでもなおトミーと共に彼女に「礼を言おうと」(269) 戸口に立つキャシーに目もくれないミス・エミリーを、イシグロが好意的に描こうとしていないことは確かである。しかし彼女の最後の言葉が叩きつけるのは、この小説において一見明白に思える「人間」たちの悪を特定することの困難さと、我々読者の立場の不安定さである。

その語りにおいて、キャシーは明らかに読者、あるいは聞き手を想定してい

る口調で、「あなた“you”」に向けての問いかけや弁解、そして言い直しを頻繁に挟みながら、親しみ深く言葉を紡いでいく。⁷ そして一見ノーマルに思えるキャシーの子供時代から現在に至る日々の特殊性が徐々に浮き彫りになる中、読者は自らがキャシーと同じくクローンの立場に置かれていることに気づくのである。“*I don't know how it was where you were, but at Hailsham we had to have some form of medical almost every week—usually up in Room 18 at the very top of the house—with stern Nurse Trisha, or Crow Face, as we called her*”（筆者による強調: 13）。第2章の冒頭で、キャシーはヘイルシャムで毎週のように行われていた健康診断について、このように懐かしげに語る。カラスに似た厳しい顔つきの看護師によって、将来健康な臓器が提供できるよう綿密に検査されるクローンの子どもたち——「あなたの施設ではどうだったかは分かりませんが」というキャシーの言葉によって、この時点ではシステムの全容を知るには程遠いながら、読者は無意識のうちに看護師が属する人間の世界から、クローンの世界への移動を余儀なくされる。そしてキャシー、トミー、Ruthたちクローンの三角関係から生ずる微妙な感情の浮き沈みに没頭する中で、この看護師が「厳しい」顔を見せていた理由、子供時代のキャシーたちに取り囲まれたマダムがどうしようもない恐怖と嫌悪を滲ませた理由、クローンたちの発育環境改善に人生を捧げたミス・エミリーがそれでも彼らに愛はおろか好意すら持てなかった理由を理解する視点を、完全に奪われるのである。

キャシーの語りによって、読者は言わばクローンの内部に没入する資格を与えられ、ミス・エミリー、そして英国民全体がこれほど「人間的な」クローンたちに、なぜここまで無慈悲な仕打ちを与えることができるのかを把握することができなくなる。しかし一方で、我々には最後に至ってもキャシーたちクローンの在り様の根本的部分さえ分かっていないことも、また事実である。例えば、自分たちの「親かもしれない」人物、「ポシブル」について、キャシーた

7 TokerとChertoffは、キャシーの読者への語りかけがテキストの前半3分の1に集中していることを指摘し、その時点で読者のクローンへの同化という“mission”（168）が完了していると論じている。

ち自身もただ推論を重ねるばかりである。瀟洒なオフィスで働く女性が自分のポシブルかもしれないという淡い期待を絶たれたルースは、遺伝子の提供者たちが麻薬中毒者や娼婦といった「クズのような人間“trash”」に違いないことは「皆知っている」(166)と叫ぶが、勿論苗字を持たない彼らが如何に誕生したのか、一つの個体から遺伝子が提供されているのか、それとも何らかの手段で合成されたものであり、「ポシブル」の概念そのものがクローンたちの哀れな夢であったのか、明確な説明はどこにも示されていない。

更に、クローンたちの身体及び精神についても大きな謎が残る。すなわち思春期を迎えたキャシーが苦しむように彼らは確かに性欲を持ち、性行為を行うものの、彼らには繁殖機能がないことをキャシーは明言している。ヘイルシャムでは性教育が行われるが、クローンたちのセックスに対して保護官たちが曖昧な態度である理由についてキャシーたちは議論を重ねる。その中で提示される一つの説が次のようなものである。

Someone else said what we had to remember was that the guardians were “normals.” That’s why they were so odd about it; for them, sex was for when you wanted babies, and even though they knew, intellectually, that *we* couldn’t have babies, they still felt uneasy about us doing it because deep down they couldn’t quite believe we wouldn’t end up with babies. (97: イシグロによる強調)

キャシーたちにとっても周知の事実として述べられる、この「理性的に考えれば子供ができるはずはない」という言葉が示唆するのは、クローンたちの身体に何らかの「アブノーマル」な操作が施されていることに他ならない。前述したモーニングデイル事件の説明によれば、「優良種」の作製は「違法」となる訳だが、「提供プログラム」の円滑な運営に利する操作は当然「合法」と考えられる。従って、本作におけるクローンたちの過度な従順さ、人間に対する反抗心の欠如の説明として、ロボットミー的な処置の可能性も当然あり得る。⁸ テクスト

中で、クローンたちは確かに思考を重ね、自らを取り巻く状況について推論を立て、幾つもの判断を下す。しかし彼らの思考は、決して自らの命を奪うシステムそのものの「悪」を認識するには至らない。我々読者がいつしか彼らの一員として共感している、クローンたちの「人間的」感情及び思考の根底には、彼ら自身には感知できない、そして如何なる段階でも決して知らされていない重大な「欠陥」があるのかもしれない、それこそがミス・エミリーたち「ノーマル」な人間が彼らに抱く忌避感の原因であるかもしれないのだ。

『わたしを離さないで』の結末において、読者は言わば「クローンと繋がっているという我々の幻想の裏に潜む深淵」を突きつけられることになる。人間とクローンという2つの集団が存在し、前者は明らかに残酷な手段で組織的に後者を搾取、殺害している。正にアーレントが指摘する「凡庸な悪」を体現したかのような人間たちは、クローンの苛酷な生と死の実態に目をつぶり、その倫理的責任について全く思考することなく、ただ自らの安寧の確保に終始している。キャシーの語りによって冒頭から「クローン側」に導かれた読者は、当然こうした彼らの「非人間性」に憤り、一方でキャシーたちの愛と友情の中に確かな「人間性」を見出し、共感する。しかしながら、最終的には読者はどちらの集団についても理解することを阻まれる。クローンたちの感情が如何に細やかな機微に満ちたものであれ、彼らの身体及び精神の根幹部分は謎に包まれている。キャシーの静謐さが、そしてトミーの決して他者に向けられないことがない「癩癪」が、彼らの個性であるのか、それとも何らかの人為的措置の結果であるのか、我々には判断する材料が一切与えられない。つまり我々には、彼らが何者であるのかさえ、分かっていないのである。従って、この物語の中の人間たちがクローンに対して抱く強い忌避感に何らかの根拠があるのか、という問いに対する答えもまた、読者の手の届かないところにあるのだ。

8 前述した『アイランド』と比較して、映画版『わたしを離さないで』のキャラクターの行動のリアリティのなさを批判した *Nature Medicine* の劇評は、次のようにコメントしている。“Perhaps they’ve had treatments to make them more tractable? We don’t really know.”

小説の最終場面において、人間によって「完了」させられた恋人が自分に向かって手を振ってくれている、という幻想に浸る束の間の贅沢を自分に許した後、キャシーは「それがどこであれ、私が行くべき場所」(288)に向かって車を出発させる。その姿に、全ての人間が共有する生の儚さというメタファーを見ることは勿論可能である。しかしその解釈だけでは包含しきれない、極めて現代的な、そして切迫した問題を本作は確かに提示している。読者は犠牲者の、そして篡奪者の姿を目の当たりにするものの、しかしその悪を特定することの困難に直面させられる。そしてその困難は、クローン作製という現実にも存在する科学技術の倫理的運用、あるいは「人間」とは何かという医科学的定義の枠に留まるものではない。それは、現代社会において民族、宗教、文化その他様々な背景に基づく集団が、異なる集団から「異質」として排斥される際に、その事態を第三者が理解し、判断し、裁くことの困難のメタファーなのである。しかし『エルサレムのアイヒマン』の「追記」においてアーレントは語る。

... human beings be capable of telling right from wrong even when all they have to guide them is their own judgment, which, moreover, happens to be completely at odds with what they must regard as the unanimous opinion of all those around them. (295)

彼女の言葉を指針とするならば、「深淵」を前に立ちすくむ読者は、たとえキャシーの心身に如何なる「アブノーマル」な要素が潜んでいるのか分からなくとも、彼らを死においやる人間の「悪」について判断を下さなくてはならない。それは正に個々の読者の思考と想像力に委ねられており、困難を越えて解釈を積み重ねることこそが、我々が現実社会において「凡庸な悪」に加担することを回避する一助となるのではないか。『わたしを離さないで』において描かれた、架空の英国社会に蔓延する凡庸な悪と、それを感知しない、またはできないクローンの哀切な感情と対峙する読者に、アーレントが人類の希望を見た思考の力は託されているのである。

引用資料

- Arendt, Hannah. *Eichmann in Jerusalem: A Report on the Banality of Evil*. Penguin Books, 2006.
- “Award Ceremony Speech.” NobelPrize.org. Nobel Media AB 2018. Fri. 31 Aug 2018. <https://www.nobelprize.org/prizes/literature/2017/ceremony-speech/>
- Bradshaw, Peter. “*Never Let Me Go*—Review” *The Guardian*, 13 Oct. 2010. <https://www.theguardian.com/film/2010/oct/13/never-let-me-go-review>
- Euben, J. Peter. “The Butler Did It.” *Naming Evil, Judging Evil*, edited by Ruth W., Grand, U of Chicago P, 2006., pp. 103-20.
- Ishiguro, Kazuo. *Never Let Me Go*. Vintage, 2010.
- . *The Remains of the Day*. Vintage, 1988.
- Jervis, Lauren. “Childhood in Action: A Study of Natality’s Relationship to Social Change in *Never Let Me Go*.” *ESC: English Studies in Canada*. vol 38, no. 3-4, 2012, pp. 189-205.
- McGowan, John. “Sufficient unto the Day: Reflections on Evil and Responsibility Prompted by Hannah Arendt and Kazuo Ishiguro.” *Soundings: An Interdisciplinary Journal*. vol. 91, no. 3/4, 2008, pp. 229-54.
- “*Never Let Me Go* and *The Island*: These Films Are Anything but Clones.” *Nature Medicine*. 24 Sep. 2010. http://blogs.nature.com/spoonful/2010/09/never_let_me_go_and_the_island.html
- “Nobel Prize in Literature 2017.” NobelPrize.org. Nobel Media AB 2018. 19 Nov 2018. <https://www.nobelprize.org/prizes/literature/2017/summary/>
- Singh, Anita. “Kazuo Ishiguro: The Book I’ll Never Write and Other Stories.” *The Telegraph*, 25 May 2015. <https://www.telegraph.co.uk/culture/hay-festival/11627759/Kazuo-Ishiguro-The-book-Ill-never-write-and-other-stories.html>
- Stacy, Ivan. “Complicity in Dystopia: Failures of Witnessing in China Mieville’s *The City and the City* and Kazuo Ishiguro’s *Never Let Me Go*.” *Partial*

Answers: Journal of Literature and the History of Ideas. vol 13, no. 2, 2015, pp. 225-50.

Toker, Leona and Daniel Chertoff. "Reader Response and the Recycling of Topoi in Kazuo Ishiguro's *Never Let Me Go*." *Partial Answers: Journal of Literature and the History of Ideas*. vol. 6, no. 1, 2008, pp. 163-80.

Vorda, Allan and Kim Herzinger. "An Interview with Kazuo Ishiguro." *Conversations with Kazuo Ishiguro*, edited by Brian W. Shaffer and Cynthia F. Wong, UP of Mississippi, 2008. pp. 66-88.

Wong, Cynthia F. and Grace Crummert. "A Conversation about Life and Art with Kazuo Ishiguro." *Conversations with Kazuo Ishiguro*, edited by Brian W. Shaffer and Cynthia F. Wong, UP of Mississippi, 2008, pp. 204-20.